

生命尊重 I

私たち自身の青年時代を顧みて、私も戦争で死ぬのはいやだった。しかし、戦争で死ぬのがいやだといふことが、そのまま戦争否定の名目になりうるとはおもひもおよばなかつたのです。平和論の根拠になるとは考へませんでした。それが現在、さうなりえてゐるのは、やはり、第二次大戦の結果でありませう。青年たちは、個人の人命以上に尊いものはないといふことを教へられたのであります。

それがどうしても私には理解できないのです。不愉快な憶ひ出、無謀な戦争、軍人の横暴、その他さまざまな事実にもかかはらず、それとは別個に、戦争とか死とかいふものを、ひとつの現実として認めざるをえないし、個人の生命と食ふに困らぬ生活と、この二つを無上のものと考へるわけにはいかないのです。

それなら個人の生命より大事なものはなにかと問はれると困る。かんたんに答へられることではありません。しかし、個人の生命より大事なものはないといふ考へかたは、大變な危険思想であつて、それは裏がへしにすれば、任意に他人の命を奪つてもいいといふことになるのです。

生命尊重 II

平和論とか再軍備反対とかいふものが青年一般に支持されてゐる根柢には、生命尊重の考へかたがあります。戦争中の生命蔑視の反動でありませう。さう考へれば納得がいくのですが、これは問題だとおもひます。そして、遺憾なことに、日本以外には、ほとんどこの国にも通じない思想であります。昔は個人の生命よりも祖国が大切だといふやうなことをいつた。祖国のためには死ぬことを辞さなかつたのです。祖国といふと昔の国粹主義の臭ひがしていやですが、国や民族の生きかたを守らうといふ気もちは是認できます。個人の生命より全体の生命を大事にするのが当然でせう。

が、戦後、その全体の生命としての国家といふ觀念が失はれてしまつた。ですから、個人の生命より大事なものはなくなつたのです。それを無理に焦つて、変な愛國心を捏造ねつざうしようとしてもだめです。そんな附焼刃でどうにもなりはしない。が、個人の生命より大事なものはないといふのは変態だといふことくらゐ自覚しなければなりません。それを常態として、いや、最高原理として、戦争と平和とを論じることとはできません。その点を、今の若い人たちに、よく考へてもらひたいとおもひます。

生命尊重 III

言ふまでもなく、最高価値としての平和は、それによつて何等かの文化的価値を守るためのものではなく、他の凡ゆるもの^{あら}に替へてもこれを守るべきものとなります。尤も、この場合、「凡ゆるものに替へても」は決して「命に替へても」といふフレイズには繋りません。なぜなら平和といふのは生命保存の本能といふ言葉の代用語だからです。もともと自分達には命に替へても守りたいもの、或は守るに値するものは何も無い事を教へられたからこそ、平和が最高価値になつたのです。命に替へても守りたいもの、或は守るに値するものと言へば、それは各々の民族の歴史のうちにある固有の生き方であり、そこから生じた文化的価値でありませう。その全部とは言はないまでも、その根幹を成すものをすべて不要のもの、乃至は悪いものとして否定されれば、残るものは生物としての命しかありません。平和が最高価値と言ふのは、生命が最高価値といふ事です。その意味でもエゴイズムとヒューマニズムとの擦り替へ、或は混同が生じてをります。